
寂しがり屋の猫を何週間か放置すると

コノエイクノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寂しがり屋の猫を何週間か放置すると

【Nコード】

N7466E

【作者名】

コノエイクノ

【あらすじ】

ある男とその妻のお話し。そこに物語はなく、日常があるだけ。特別じゃ話しじゃない。けど、少し暖かいお話し（多分……）

(前書き)

家で飼ってる猫を擬人化して、嫁にしてみました。うちの猫は本当にこんな感じですよ。(今から始まる本文は作者の自己満足ですよ。すみません……)

昨日、必死で仕事を片付けたおかげで一日休みを貰うことが出来た。何ヶ月振りかのしつかりと眠れる休みだ。

久し振りに帰った自宅。帰ったのが夜中だった事もあり、妻を起こさないよう考慮して俺は自宅の仕事場のソファで寝ていた。エアコンがしっかり効いていてまったく寝苦しくない。この仕事場に窓はないが、今はそれが逆にありがたく思える。

そして、今。腹の辺りに重みを感じ、まだ重い目蓋を少し開けると、妻が馬乗りになって俺を見下していた。

「なに？」

きつとまだ寝始めてから四時間位しか経っていない。すぐ横のテーブルに置いた目覚まし時計を見るとちょうど午前九時を指していた。

「……起きないの？」

普通の女性よりも少し高めの声が耳に届く。とても成人式を迎えた奴の声じゃない。目を閉じて聞けば、まだ中学生くらいだ。妻『麻冬』の幼い所は声だけじゃなく、体格もそうだった。百五十を越えない身長、幼さの残る顔、軽すぎる体重。そして、何故か白く長い髪。脱色ではなく元からこの色らしい。

「あ……俺、帰ってきたの三時なんだ。だから、もうちょっと寝かせて……」

そう説明すると、麻冬は『……そう』とだけ答えて部屋を出て行った。俺は乱れた毛布を直し、再び目を閉じようとするが、その前に部屋のドアが開いた。

「なに？」

「……喉、渴いてない？」

テーブルの上にカランつと音を立てて何かが置かれる。多分飲み物だろうが、それを見る余裕さえ今はなかった。

「……後でもらうよ」

「……そう」

返事は返ってきたが、部屋を出ていく気配が全くない。気にせず無視していると、とふつと胸あたりに何かが置かれた。薄目で見ると、麻冬が顎を俺の胸に乗せてジッとこちらを見ていた。

「お前、今日はやたらと絡むな……」

麻冬はいつもこころではない。いつもならば一番初めの『そう』でもう部屋には入ってこない。ましてや飲み物を持ってくるなど有り得ない。

「寂しいのか？」

しばらく仕事で手一杯だったのであまりかまってあげた覚えがない。絡む理由があるならばそれだろう。

が、麻冬はふるふると首を振る。

「……寂しくない。……何でもないの」

「じゃあ、何だ？」

「……何でもないの。……邪魔して、ごめんなさい」

しゅんとする麻冬の頭を撫でてやる。まるで猫のように気持ちよさそうに撫でられる麻冬。そこで眠気が俺の記憶はプツリと切ってしまったのだった。

次に起きたのは午後八時。久し振りによく眠ったので身体が楽になったような気がする。視線を時計から胸に移すと、麻冬は顎を乗せたまま眠っていた。口を開けてなんとも無防備だ。

「麻冬。夜だぞ」

肩を掴み、少し乱暴に揺らす。麻冬は一度寝てしまつとなかなか起きないので、これ位がちょうどいいのだ。

「……んっ……あ……？」

「夜だぞ。飯食おう」

「ん……」

一度伸びをしてから立ち上がる。それに続くように俺もソファ―

から立ち上がり伸びを一度。それから歩き出すと、麻冬が俺の手を握っていた。白くて冷たい麻冬の手。

「お前、やっぱり寂しかったんだろ？」

「……寂しくない」

まだ眠いのか、空いた右手でまだ目を擦っている。

麻冬は昔から意地っ張りな女の子だった。他人に指摘されても認めず、それが真実でも否定し続ける。でも、嘘を付くのは物凄く下手なのだ。

「もういいだろ？」

「……や」

寂しくなかったと言う割には、さっきから俺の手を離そうとしない。時にはギュッと握り直したり、時には自分の頭に置いて自分で動かして満足そうな顔をしたり、時には顔を擦り付けたりしている。俺は気にせず片手で箸を使いながらテレビを見る。

「寂しかったか？」

「……寂しくない」

「寂しかったかんだろ？」

「……がぶっ」

全く痛くはないが、麻冬が俺の手をかじった。彼女なりに誤魔化しているのだ。昔から変わっていない。嘘を付くと、何かを触つてないと落ち着かないのだ。

「ごめんな」

「……や」

かじるのを止めて、また手を弄ぶ。俯いて顔は見えないが、寂しかったという雰囲気だけは漂っていた。

「ごめん。これからは毎日帰ってくるからさ」

「……」

麻冬は何も言わなかった。顔を上げて、ベーツと舌を出してから俺の膝の上に丸々様にして乗り、頬を何度か擦り付けて眠ってしまった。

俺はそんな彼女の頭を撫でながら、視線だけをテレビに戻した。

何だろ？麻冬が何かの動物に似てる。

撫でられるのが好きで、自分主義で、指図されるのが嫌い、寂しがり屋で。

「……ああ。あれだ」

朝が来るまでまだまだ。時間が経って、君が目覚めたなら、有給

を取って何処かに出掛けよう。広い広い芝生のある暖かい場所へ。
きっと君は喜んでくれるだろう。だって君は

「猫」

にそっくりなのだから。

END

(後書き)

クロ助という猫を飼っています。その子供が産まれて、その子猫を擬人化したのが今回のです。名前はマジに『麻冬』。う、嘘じゃないぜ？(笑)本当にコノエの手を自分の頭に乘せて、気持ちよさそうに目を細めたり、顔を何度も擦り付けたりしています。ただ、寝る場所が胸じゃなく、顔です(笑)そこにクロ助も混じるので、いつ窒息するかとハラハラしています。評価や感想をお待ちしておりますっ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7466e/>

寂しがり屋の猫を何週間か放置すると

2010年11月20日22時32分発行